
復讐の牙

Syurutu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

復讐の牙

【Nコード】

N3639I

【作者名】

S y u r u t u

【あらすじ】

ヒト《ホモサピエンス》の栄えた世界は潰え、今や世界を支配するのはヒトよりも強靱な体や、遙かに高度な知性を持った新人類達。

魔術と科学が混在するファンタジー世界で“穢れ”と呼ばれた少女はどう生きるのか。

作者は厨二病患者ですので諸所イタイ設定が頻出しますがスルー出来る寛大な心を用意してから閲覧してください。

序章（前書き）

酷くイタイ表現や設定、台詞などが頻出し読者様方のご機嫌を損ねたり、失笑を買ったりする可能性が多分に含まれております。

それでも読んでいただける心がロシア連邦よりも広い方のみ御覧覧ください。

序章

かつてこの世界はヒト（ホモサピエンス）が全てを支配していた、その確固たる証拠は世界各地に点在する“遺跡”が沈黙をもって示している。

だがヒトが栄華を誇っていたのは何時のことかも分からぬ遙か昔の事。

ヒトは最早万物の霊長ではなく、霊長類の下層に位置する存在に成り下がった。

新たな人類（この場合霊長類を指す）はヒトよりも優れた能力を持ちヒトはそれらに駆逐されつつある。

霊長類ヒト科ヒト目ウツドリヴィス、通称エルフ、ヒトには想像すら出来ない深い思慮と知識。“殺されない”限りは死ぬ事の無い強靱な体を持つこの種族が新たな世界の主である。

彼等は“遺跡”からかつての栄華の残滓をかき集め、自らの持つ文明、“魔力”と呼ばれる精神エネルギーを用いた技術とを組み合わせて日々文明を発展させていった。

その結果、エルフ達はこの世界に盤石なる支配体制を築き上げる事に成功する。

ヒトはもはや取るに足らない生物に過ぎない。栄える事の出来た最たる理由である思考能力ではエルフには遠く及ばず、純粋な力では亜人種の鬼達には全く敵わない。

ヒトは、エルフが保護しなければ生きていくことの出来ない脆弱な生物でしか無くなっていった。

この世界は“クリスタニア”と呼ばれ、旧世界（ヒトの栄えた世界）の言葉で“神の国”を表す名称で呼ばれている。

五つの大陸を持ち、その内の一つは全土が熱い氷で覆われた不毛の地であり、残りの三つはエルフが支配し、残る一つは蛮族（エルフから見た蛮族は鬼属にのみ限定される）が血で血を洗う戦争を永

劫に続けるであろう地。世はエルフが治世を進める開拓歴19
7年、人々は一応の平和の中にあつた…

序章（後書き）

もしよろしければ感想ください。誤字、脱字、ここの文法がおかしいなどありましたらどうぞご報告ください。

第一章 森の中の少女（前書き）

ひっそりと第一章。

主に作者の趣味で構成されており、若干残酷やも。

第一章 森の中の少女

「私は岩だ」

私は無意識の内に呟いていた。仕事をするときのいつもの癖。いや、どちらかと言うと癖よりも習慣や願掛けに近いのかもしれない。この呟きを聞くと自然に体の感覚が消えて自分が一つの正確無比な機械になった気がしてくるのだ。

こつ言つのを確か自己暗示とかと言ったような気がする。先週読んだ週刊誌にそんな事が書いてあった。

ここは森の中、よほどの物好きか密猟者、もしくは私のように仕事できた者しか訪れることの無いであろう最深部。直径が六mを軽く越えるような巨木が密生しているので一筋の光りすらも入らない“ノーチラス大陸”一の辺境。

「岩は恐れない」

ハンドルを引いて薬室を開放、腰の多目的ポーチから引つ張り出した巨大な黄金色に輝く弾丸を装填してハンドルを元の位置にまで戻す。

重厚な金属音が耳朶に心地よく響く。この音を聞くと今から戦つのだという気分させられる。

「岩は見つからない」

今現在私は少々人から発見されにくい状態にある。地面を浅く掘ってそこに収まり、上にその辺の枯れ木や枯れ草を貼り付けた布を被っているからだ。

なぜそんな珍妙な格好をしているかと問われれば無論仕事でだ、それ以外ではこんな蒸し風呂のような状態は願い下げだ。

「岩は震えない」

言葉通りに震えは無い。凄まじく重い、女である私が取り扱うには若干重すぎるくらいの大長な鋼の相棒は地面にバイポット（二脚）で固定されているからだ。無論相棒も背景にとけ込めるように私と

同じく入念に偽装してある。

「偉大なるクトゥルフよ我に力を…」

ノーチラス大陸で最も信者の多い宗教、クトゥルフ教の神に祈りを捧げる。別に信心深い訳じゃないが家族が熱心な信者でよく教え込まれたからこれも自然に口から出るようだったただけだ。

因みにクトゥルフは“遺跡”から発掘された書物に記された神話で、一様に神様らしくない神を奉った奇異な宗教である。

「大いなる全ての父アザトースよ私の弾に全てを打ち砕く力を…」
相棒の上部マウントレールに据え付けられたテレスコープに仕事の標的が映し出されている。

周囲の木々から対比して身長はおおよそで3m超。

体そのものは辺りの一番太い木と比べても遜色のないほど太く、隆々とした筋肉に覆われている。

腕一本とつてもまるで丸太だ、軽く撫でられただけでも私なんか爪楊枝のようにぼつきりと折れてしまっただろう。

形態は人型、力仕事に特化したのか右腕がやたらめったらと太く、その右手に倒木から削りだしたであろう棍棒を握り粗雑な獣皮のトーガをその巨体に纏っている。あのトーガを使えば軽く家一軒を覆えそつだ。

スコープのおかげで姿は分かったが色は全く分からない、いかにせん暗いのでそればかりは我慢するしかないだろう。この仕事で得た給金で暗視装置付のスコープでも買おうかしら。

暗い森の中でもそれには一目でわかる目印が付いている。

額から生えたつつすらと発光するまるで天に挑むかのような立派な“角”だ。

「千の子を孕みし森の黒山羊よ、どうか慈悲をあたえたまえ…」
相棒の安全装置は既に外してある、何時でも撃てる状態だ。

スコープは風、湿度、距離を計算して修正済、計算はもう無意識にでも出来るレベルまで来ているし、まず間違っ事はないはずだ。
そう思いたい。

次の瞬間には、私は相棒の重いトリガーを引き絞っていた。

相棒が森全体を震わせるかのような咆哮を上げてその口から鉄の猛威を吐き出しす。両サイドにある噴出口からガスと熱風が一気に噴出され私を覆い隠していた布を吹き飛ばしていった。

スコープの中で目標の腹が文字通り“爆ぜた”。

血煙が舞い上がり粘液にまみれたどす黒い腸が湯気を上げながら盛大ににまき散らされる、弾頭にしこまれている散弾が腹の中で炸裂したのだ。

あまり見えていて気の良い光景ではない、むしろ気味の悪い光景だ。私はスコープから目を離し穴から起きあがる、着ていた装甲服が泥で酷く汚れてしまっていた。洗う手間を考えると酷く鬱だ。

吹き飛ばされた布はすぐ隣に落ちている。

木っ端や枯れ葉を勢い良く振って振り払うときれいに全て取れた。

布は艶がある黒でなかなか手触りが良い。

二つ折りにして腰のベルトに止めて布を腰巻きにする、前は覆わず両腿までを隠すようにすると丁度良い具合になるのだ。

因みにこれは本来このように使う物じゃない、ただ単に持ち運びを簡単にするためと自分の姿に威圧感をもたせるためだ。

相棒を肩に担ぐ、かなり重いが苦痛でもなんでもない、むしろ逆にこの重さを感じていると妙な安心感を得られる程だ。

「やったかな…」

独り言で打ち抜いた標的の元へ走る、始末した証に両耳を持ち帰るためにだ。

目標までは少し長く走らなければならぬだろう、なにせ千五百mも離れていたのだから…

おれは今地面に横渡っている、だからといって眠い訳でも疲れた訳でもない。

食料を探しにでたらいきなり大きな音が響いておれの下半身がどつかにふっとんでしまったからだ。

いや、ふっとんだのは下半身じゃなくて上半身か、おれの腰から下はまだもとの位置にたっている。大量の血を吹き出しながら。

これじゃダメだ、早くなんとかしないと。おれが食料をとってこないとよめがうえてしまう…もうすぐ子供もできるってのに…

這って下半身に行こうと思ったけど体が動かない…急に寒くなってきた…

どれだけじかんがたったのかはわからない、すうぶんか、すうじかんか…まあじかんがすぎたのはたしかだ。

むこうからだれかくる…おんなだ、おれたちとはちがうしゅぞくの……だめだかんがえるのもおっくうになってきちまった。

あれは…そうだ、くされエルフのめすだ。めすはおおきなてつのかたまりをもっていた…なんだっけ……そうだ、たしかじゅうとかいうぶきだ。あれでおれをふつとばしやがったんだちくしょうめ。

めすはくるいからだにそったかたちのふくをきている、むねやはらにはうすいぶんかつされたてつのいたがはってある…エルフどものよろいだ…

「が…が…」

こえがでない、くそエルフめころしてやりたい。

エルフのめすはわかかった、まだこどもだ。

こども…そうだ…おれのこども…

「まだ生きてる…凄まじい生命力…」

エルフのめすがなにかいつてるがきこえない…そんなことよりもよめとこどもが…

エルフのめすがみぎかたのよろいをはいだ、どうなってるのかはわからないがくだものかわをむくみたいにつるりとむけた。

みぎかたはくろかった、ただくろかった。ふつうのうでじゃない、はがねでできてるみたいだ…

それよりおれのことも………

私は右腕に装甲服を纏い直して一息ついた。目の前に横たわる巨体は巨鬼とよばれる亜人種の一つでひどく凶暴な性格をしており、何日か前に森を横切った商隊をおそってエルフの男女七人を殺し討伐目標にされた奴だ。ノーチラスよりも未開大陸で殺し合っている方が似合う種族だが、いるところにはいるものだ。

私の巨鬼を見る視線にはきつと哀れむような色が含まれているのだろう。

この巨鬼という生物はかつては巨大な脳でエルフにも負けない思考能力と“少し先の未来を読む”等という不可思議な力を持つ優良種の一つだったらしい。

それは開拓歴より二千年も昔の創世歴の話で、やはり今と同じくエルフとはいがみ合っていた。

だが創世歴の半ばになろうという頃に、巨鬼にのみ感染する奇病がはやった。その病は脳を破壊し極端に思考能力を奪い知識を奪うものであったそうだ。

病の遺伝子は巨鬼そのものの遺伝子に宿り今も彼等を蝕み続け、彼等を下等な生物に貶めている。

かつてはエルフに並ぶ広大な版図を支配していた彼等も、今となつては片言の人語を操るくらいしか能のないヒトよりも下層に位置する害獣だ。

そう思うと私は少し彼等を哀れに思つてしまふ。もし病が巨鬼ではなくエルフを選んでいたらどうなつていたか……

頭を振つて思考を消し飛ばす、よけいな事を考えている余裕はない。私は腰から一振りのナイフを取り出した。

ナイフはつや消し加工を施されたマッドブラックの子供の前腕部程の大きさを持つ軍用の物。便利なんだが少々私の手には余る代物だ。

ナイフを硬質な鞘から引き抜くと、澄んだ音をたてて刀身が姿を現した。

緩く弧を描く鞘と同じマッドブラックがだ妖しい艶のある刀身に私の顔が写る。あいかわらず無愛想で潰れた右目と、それをふさぐ金属片の目立つかわいげのない顔だ。

ナイフの太いグリップを握り込むと、ナイフの刀身が浮き上がるような奇妙な音をたてて赤く赤熱しはじめた。

このナイフは遺跡から掘り出された“遺品”のコピー品。たしか単分子カッターとかいうヒトが栄華をほこつていた時分の武器だ。

高熱で振動する刃が分子レベルで物体を両断する優れものだそうだ。

もつとも私は刀身の放つ熱を使って火をおこしたり大きな獲物を捌くのには使うこと以外はほとんど無いが……べつに下手なわけじゃない、狙撃手が好んで近接戦をするわけもないからだ。

おおきな巨鬼の頭にナイフを寄せる、頭だけでも私の胸から上ほどある、大きさだけならお祭りで見られる魔術で肥大させたカボチャ並だ。

耳の付け根にナイフをあてがうと肉が焼ける気色の悪い臭いが辺りに立ちこめた、この臭いばかりはどうにも好きになれそうないはない。

ナイフはするりと刀身を埋めていき、とがった二等辺三角形の耳を見事に斬り落とした、他のナイフではこうはいかない、巨鬼の皮膚には金属が混ざっていて生半可なナイフや剣では刃を全て削り落とされて使い物にならなくなる。我々の先祖はコレをどうやって弓矢や槍で撃退したのだろうか。

両耳とも斬り落としたら多目的ポーチに入れてきた保存ケースへしまっ、ギルド（獵団）で配布される正式装備で凍結魔術が施されているらしくこのケースに入れた物は凍り付いて、腐る事無く持ち運ぶ事ができる、誰だって腐乱臭を漂わせながら街を歩くのは嫌な物だ。

だが、その大きさは小さな文庫本サイズ、手のひら程ある耳を納めるには二つに折り曲げなければならなかった。

これで一応仕事はおしまい、街に帰りギルドに耳と報告書を提出すればしばらくは休暇だ、落ち着いて好きな事に取り組める時間は滅多にないので今から楽しみだ。

一つ忘れていた、成体の巨鬼は必ずつがいで行動しオスは巢の近くで狩りをし家族を養う、成体のオスが単独で生活することはほとんど無い。

つまりこの近くに巨鬼の巢があるはずだ。その巢も始末しないと仕事が完全に終わったとは言えない、このまま帰ったりしたら後々調査団が巢の存在に気づいた場合私は不始末で査問会にかけられ、下手をすると任務遂行能力の欠如でギルドから追い出される事にもなりかねない、そうなたら私の人生は控えめに言っても終わりだ。

「焼夷テルミット（複数の金属を混ぜて起きる化学反応で発生する摂氏五千〜七千度の熱で目標を殺傷する兵器）持って来ててよかった……」

溜め息について私は歩き出す、巨鬼の巢はそう遠くはないはずだ、この辺の五km以内に存在しているだろう。

第一章 森の中の少女（後書き）

感想、ないしは誤字脱字指摘などお待ちしております。

第二章 自由都市（前書き）

こっそりと二章。

この章に登場するキャラクターからHNを取りました。狙ってる訳じゃないよ？

すこし文章おかしいかもしれませぬ。

第二章 自由都市

俺は表面上は無表情を装って中型のカットグラスを柔らかかなコツカと呼ばれる小動物の皮から作られた布で磨いている。

コツカの皮は加工されてもなお良質なコーティング剤となる油を分泌し続けているので、よほど酷い汚れでもない限り一拭いするだけでグラスはほればれするほどピカピカになるのだが、俺はさつきからずつとこのグラスだけを磨き続けている。

他にも磨いたり洗ったりする必要のあるグラスやらコップは山とあつたが、それでも俺はこのグラスだけを洗い続けている。

何故ならと言うと、このグラス専用の客が今日ここ、バー“ルルイエ”にやってくるからだ。

因みに専用とは俺が勝手に決めたことだがマスターは黙認してくれている。

彼女は三日前に仕事で森へ出かけた、おそらく今日辺り帰ってきて行きつけであるここに来るはずだ。

彼女専用のグラスだけでなく彼女……というよりも“クトウルフ”の信者が好んで飲む蜂蜜酒、それに軽く煎ったピスタチオも適度に塩を振って用意してある。この前彼女が俺のピスタチオは塩加減が絶妙だと褒めてくれた、いかん、思い出しただけで頬が弛んでくる。

「シュルツ」

後ろで俺の名前を呼んだのはこの店のマスターだ、本名は誰も知らないし聞いてもはぐらかされるだけなので俺も聞こうとは思わない、だからただ、俺は彼のことはマスターと呼んでいる。

マスターは珍しくヒトである俺を差別しない“ハイエルフ種”のエルフだ。エルフ間での種族というのはヒトでいう人種の事だ。

“ハイエルフ種”は数が少なく純血種が産まれにくい、そのかわり膨大な“魔力”を産まれ持ち他のエルフよりもずつと頑丈だ。

そして極度の“ヒト嫌い”で有名でヒトにも権利が認められるよ

うになる開拓歴の初めまで“ヒト狩り”を続けていた種属でもある。
「シユルツよ、意中の相手が来るから浮かれる気持ちも分かるがな。給金分の仕事はしてもらわないと困るんだが」

マスターが年月を経て得た渋みのある顔に苦笑をうかべつつ俺に言った。

俺は、自分の顔が自分で分かるほど赤くなるのを感じ、はずかしくなつて苦し紛れに俯いて小さく謝った。

「シユルツ！彼女が来るからつて俺たちを無視すんなよ！」
「寂しいじゃねえかよー」

ここの常連のヒトの客が俺をちやかす、畜生めこの前ポーカーで絞つた腹いせか。

俺が腕を振り上げて怒鳴ろうとした時、カウンターから離れた席で安酒を煽っていた“ダークエルフ種”の若い男が吐き捨てるように呟いた。

「穢れた血の事でうるせえんだよ……」

一瞬で頭に昇りかけた血が退き…その倍以上の勢いで沸騰した。
多分俺はあと数秒扉が開くのが遅かったらグラスを（しかも彼女専用の物を）全力で投げつけてしまっていたことだろう。

軋んだ音を立てて両開きのオーク材の古ぼけた扉が開いた、蝶番が錆び付いているせいでいつも開く度にベルが聞こえないほどの音を立てるのだが、マスターは修理する気はないそうだ。

扉の向こうには俺の待ちわびていた人が居た。

陽光を浴びて艶やかに光る漆黒の長髪はまるで上質な絹のようで、その髪が彩る輪郭は上品で貴族めいた面長。

その顔に全てのパーツが神が定めたかのような黄金律で配置されている。

すつと通つた鼻梁、つやつやとつみ取つたばかりの桃のような艶を持つ唇。

大きく、まるで最高級の黒曜石を加工して作ったかのような瞳には、底が見えない神秘性が秘められている。

目を背けたくくなるような醜い傷、それですら彼女のミステリアスな美を引き立たせる添え物でしかない。彼女の右目は無惨に潰れ、引きつれたような傷跡が走り、その瞼を黒い金属製のインプラントが塞いでいた。

美と醜の奇跡のコントラストは見る者を魅了する、例えそれがヒトであろうがエルフであろうがそんな物は全く関係無かった。

「静かね、なにかあった？」

彼女は首を傾げて言った、純銀の鈴が鳴ったかのような美しい声だった。

客は照れ笑いを浮かべてそれぞれの会話に戻る、皆顔がほのかに赤いのは俺の見間違いではない。

彼女の名はアイナ。

ギルド（同業者組合）の狩人。

年齢は今年で二七。

その瘦躯を今は黒いロングワンピースと同色のジャケットでつつんでいる。

「久しぶりねシュルツ」

「ああ」

ああ、我ながらなんて無愛想な返事なんだろうか、声が震えなかっただけで御の字だがもうちょっと愛想良くは出来ない物か…

「いらっしやいアイナ、なんにする？」 一つの間にかマス

ターが俺の横に並び穏やかな笑みをその顔に浮かべ立っていた。

この人はなんでこんなに美しい人の前でまったく物怖じもせず立っていていられるのだろうか。

聞いて見たいがそれはあまりにも格好悪いだろうなと思ったので聞くに聞けなくなってしまった。

変に高いプライドを持ってても良いことなんか何にもないものだなとつくづく思う。

「いつもの」

そういつて彼女は俺の前の丸椅子に腰を下ろした。

いつもの、もちろんさつき俺が用意していた蜂蜜酒とピスタチオの事だ。

俺はピスタチオを他の客より少し多めに持った小皿を彼女に差しだし、彼女のグラスに蜂蜜酒を八割まで注いだ。あまり入れすぎると見た目が悪くなるので少し少ないぐらいが丁度良いのだ。

「ありがとうシユルツ」

俺からグラスを受け取ると、彼女はまるで可憐な花が咲いたかのような溢れんばかりの笑みをその顔に浮かべた。

心臓が早鐘を打つ、駄目だ頭までぼーっとしてきた。

嬉しさと気恥ずかしさで思考能力を失いつつある俺が発する事ができたのはなんと味気のない「どうも」という言葉だけだった。なんで俺は彼女の前ではこうも無愛想になっってしまうのだろうか…

「昼食は済んだのかい？」

俺の醜態を見かねたマスターが助け船を出してくれた、本当にこの人には頭が全く上がらない。

「そうね、まだだし何か頂こうかしら」

彼女は少しだけ考えて、パンケーキを注文した。

俺はパンケーキを焼くべく厨房に下がる、無愛想な対応のせめてもの謝罪に美味しいパンケーキを焼こう、分厚くて大きいパンケーキを…

私は厨房へ去って行くシユルツを見送りつつ蜂蜜酒を一口啜った。何ともいえない深くて濃密な甘みが口に広がる、甘みの中のほのかな苦みがありそれが甘みを引き立てている。

彼は終始無表情だったがどうにも他の客の話を聞けば普段は笑ったり怒ったりも普通にするらしくあんなに無表情なのは私の前でだけだそうだ。

もしかして嫌われているのだろうかとマスターに聞けば何故か苦笑いされてしまった。何故かは分からないがきつとマスターは何か知っているのだろう、なにせあの人は六百年もの時を生きたエルフだ、ヒトの心一つ読むのは造作もないことだろう。

「なにか目立った事はあったかい？」

「特には何も、ただ巨鬼が妙に増えたわね、彼等は元々何人も子供を産むけど今年は異常ね。駆除した番の雌は一人で六人も身ごもっていたわ、犬猫じゃあるまいし普通は二〜三匹で限界のはず」

私が森の中で始末した巨鬼の雌は自立することすらできなくなる程の大きなお腹をしていた、普通はそんなことにはならない筈だがそれはどうみても異常としか言いようが無かった。

ギルドは妊娠した巨鬼を発見した場合、子供の数を確認する事を義務づけている、これは彼等のおおよその数を把握するためらしい。確認となると無論腹を裂いて胎児を取り出さねばならない、出来れば思い出したくもないが私はしっかりと確認し証拠に胎児の臍の緒を全部持ち帰ってきた。後は感想文に近い形式のレポートをこしらえてそれに添えて提出しなければならぬ。ここで食事を済ませたら中央区画に本部を持つギルド【緋の灯火】本部に提出しに行くつもりだ。

「またスタンピート（大発生）が起こるかな？確か最後にこの大陸で発生したのはほんの三十年ばかり前だと思うのだが」

スタンピート、何十年かに一度おこる巨鬼が大発生する“局地的災害”。何らかの原因で巨鬼が大増殖し森に収まり切らなくなった巨鬼が群れを成して食物を求め、近隣の村々を襲うのだ。

発生する度に農畜産業に多大な被害を与え、種族に関わらず多数の死者が出る大惨事になる。軍がクラスター爆弾やナパーム弾、広範囲魔術で焼き払って納めるのが一番にして唯一の対抗方法だ。因みに三十年前の被害は特に酷く、自由都市以東の村が全滅、駆除のために二十二の村、十一の街、七の主要街道、そして森の五分の一を焼き払わねばならなかったそうだ。

それでも絶滅しないのだから奴等の生命力と繁殖力は凄まじいものだ。

「スタンピートなら気が早い今の司令官は今すぐにもありつたけのナパームやクラスターかき集めて準備し出すでしょうから、昔ほどの大惨事にはならないんじゃないかしらね。」

私の意見にマスターは苦笑をもって答えた。今の軍司令官は気が早い事で有名で、早とちりして反エルフ同盟所属の疑いがあっただけで小さなヒトの集落を一つ大規模魔術で焼き払ってしまった事がある。

この事件は強引にでっちあげた証拠で本当に反エルフ同盟の集落を焼き払った事にされ、ヒトの集落の一つが消えたくらいの事は世間では大した事件では無く、一部の情報を知る者以外はこの事件の真相を知ろうとすらしなかった。

ブン屋（新聞記者）は芸能人のスキャンダルを求めてその尻を追うよりももっとこういう事に力を注ぐべきではないのだろうか。

「まあ君も私も自衛の手段を幸いにも持ち合わせている事だ。もし起こったらあの暗愚な司令官がうつかりここを更地に戻してしまわないうちにさっさと店を畳んで、従業員一同逃げ出すとしよう」
頷き、ピスタチオの空を割り砕き、中身を一つ口に放り込む。よく租借して飲み下しグラスに少し残った蜂蜜酒を全て煽った。

「おかわりは？」

「いただくわ」

グラスを差し渡し、手慰み代わりにピスタチオの殻を幾つかまとめて握り砕く。ちまちま砕くのは面倒臭いがどうにもからの欠片が

飛び散つてよろしくない。それでも私は基本的にはずばらなのでこんな横着をしていまいがちだ。

再びその身に黄金色の液体を注がれたグラスが差し出された。私はそれを受け取り軽く煽る。アルコールが徐々に体を巡り体が火照ってきた、おそろく今の私の頬は赤く上気していることだろう。

しばらくするとシュルツが厨房から見るとに美味しそうな暖かい湯気を立てる直径十五センチ、暑さ五センチほどもある巨大なパンケーキを皿に三枚も、なんと三枚もだ、のせてやってきた。

大きく切られたバターも乗せられて良い具合に蕩け食欲を誘う、その横のメープルシロップの小瓶もたまらない。

そういえばここ最近（主に仕事中の事だ）は粘土のような携帯食料のみのまともとは言い難い難い食生活を送っていたので俄然食欲が湧いてきた。

「どつぞ」

「ありがとう」

思わず顔が綻ぶ、皿は両手で受け取ってもずっしり来るほど重かった。さて、どこから切り崩そうか………

第二章 自由都市（後書き）

感想や誤字脱字の指摘よろしくお願いします。

幕間（前書き）

こそつと幕間。ちょっととした複線。

こんな露骨な複線があるかいつて？ まあ80年代のアニメに近いものと考えてください。ビバご都合主義。

幕間

「見つけた：長かった」

暗く埃が舞う手入れの行き届いていない部屋の中で一人の男が、低く、陰鬱な呟きを漏らした。

部屋にはたよりない細く短い一本の蠟燭しか灯りが無く、大して広くもない部屋の空気はこもっていてとてもではないが長居はしたくない環境だった。

男の前には粗末な長机があり、その上にはなにやら羊皮紙に共用語で細かく様々なことが書き込まれた文書や、凄惨な死体の散乱する廃墟、興廃した穴蔵の写真が山のように散乱している。

全てに“部外秘”やら“最重要機密文書”のどの文字が躍り、写真には隅の方に“検閲処分”と判子が押されている。

男が見ているのは自由都市より遙か西にあるノーチラス最大の魔術都市“フラメル”に存在する世界最大の魔術師ギルド“アルマゲスト”が管理する禁書や焚書の類である。様々な理由で一般市民、果ては政府にですら公表しえない情報を男は密かに閲覧しているのだ。

男の背は高く、二メートルを超える。その長身は細く、しなやかな筋肉が覆い、さらにその上に絹で出来た漆黒のローブを纏っている。

腰に一降りの豪華な作りの長剣を携え、僅かに覗く前腕部は黒く染め上げられた手甲で覆っていた。

「これだ…探した…四年間…」

男が握り締める一枚の羊皮紙、ぐしゃぐしゃになりなじみ出た汗でインクが霞んでいる書類には“即時焚書処分書類”の判が押されクリップで添付された数枚の写真にも同様の判がされている。

写真は鋼鉄の白い廊下を写した物で、その白い廊下には何らかの凄まじい力で紙切れの様に、文字通り“引き裂かれた”魔術加工の

装甲服を着たフラメルの特捜探査員の亡骸が映し出されていた。

撤甲弾ですら易々と弾き飛ばす装甲服が、その持ち主と共に薄紙にナイフを通したかの如くなめらかな断面を覗かせている。

他の数枚の写真もにたような物で皆凄惨な死に様の特捜探査員の血溜まりに沈む亡骸を納めた物だった。

最後の一枚、一番後ろの写真。

それには何か紅く、ただただ紅く光る禍々しい瞳を持つ犬の様な生物の頭部がいつぱいに移っている。

その写真を握りしめ、男はある確信にもにた感情をいだいていた。自らの、仲間の復讐の目評。

輝ける過去を奪い去った憎んでも憎んでも足りない怨敵。この写真に写るものがそれであると、男は心の奥底で直感に似た確信を得ていた。

「これで終われる…全部が…終われる………フフフ…フフフフ」
籠もるような笑いは何時しか高々と響き渡る哄笑へと変わっていた。喉に疼痛が走るが構うことはない、男は今、とにかく笑いたい気分だった。

その笑いは聞くだけで怖気の走る邪悪な笑い、込められる感情は狂気と狂喜、そして強い憎しみ。

復讐者は動きはじめた、滾々とわき上がる陰鬱な哄笑を引きつけて。

忙しくなると男は一旦笑いを止めて呟いた、狂った嗤いはもう次の瞬間には再開されていたが、男は動き始めていた。

書類をロープに押し込み部屋の出口、古ぼけた櫛の扉へ向かう。

各地に散った同じ向く敵を持った復讐者を呼び集めるために、復讐ののろしをあげ準備を整える為に。そして、ひとつの噂を確かめる為に………

幕間（後書き）

感想及び（r y

第三章 右腕と魔女（前書き）

こそこそと三章。

褐色肌いいよね、健康的で。

あと機械とかも大好きです、欠損も。

第三章 右腕と魔女

昼食を終えた私は、店を後にし街の中心街へ脚を向けている。石畳の舗装道路をブーツの底が叩く小気味良い音が耳に響く。

その音はブーツの底に鋼板を仕込んでいるので他の人のたてるそれより少々硬質で高い。

自由都市はほぼ全域が良く言えば情緒の有る、悪く言えば古くさい石煉瓦造りの建物で締められている。僅かにだがコンクリートの建物もあるがそれは市役所等の公共施設で頑強性の問題でそうなっているだけだ。

人々はこの街を交易と石の街と呼ぶ。自由都市の名も元々は交易の中心で関所を設けず関税が無く貿易を行えるところからついたのだ。今でも大きな為替取引所や造幣局等も備える交易の中心地として栄えている。

目的地は中心街の市役所の隣に位置するギルド“緋の灯火”本部。そこにレポートやら何やら必要な物を提出に行くのだ。ポーチに巨鬼の耳やら臍の緒入れて街をうるつくのは少し気が引けるがまあしかたあるまい。

あ、もし官憲に職務質問された場合どうすればいいんだろうか、切り取った耳やら乾燥しきってない臍の緒とか持ってたら絶対捕まるだろうなあ…今日は狩人証書を持って来ていたかな？

街の中心街に行くにはバスや魔術融合炉で稼働する汽車等の交通設備もあるが、私はどうもどちらも好きにはなれない。一つの狭い空間に何人もの見ず知らずの他人と居るなんてのは私には耐えられそうにないからだ。

ルルイエは中心街からすこし東にある、大体徒歩十五分と少しと行ったところだろう。私はある路地の前で足を止めた、何の変哲もない薄暗いだけの通路だが、この路地は少し特別だった。

この通路は中心街の北側に続いている。

そこは元々の中心街にして自由都市の原型が位置する場所、旧中心街だ。

この街は旧中心街から外へと建物や城壁を広げながら出来ていったもので、大昔のある年、街の北側に大きな地下水脈が発見され、それ以上北に開拓すると地盤沈下を起こす恐れがあったので北への開拓を止めたのだ。

中心街は全ての交通システムの要となる要所で、街の中心に有る方が何かと都合がいい。だから当時の中心街は新たに南側に作り直され、抜け殻となった旧中心街だけが今も残っている。

それだけなら何て事のないありふれた都市計画で衰退した一区画でしかないのだが、それだけの事ならば旧中心街は物理的、魔術的な意味において“隔離”されることは無かっただろう。

中心街が移動した後、しばらくは何事もなかったのだが、ある日事件が起きたのだ。

ある小さな魔術師ギルドがうつかり作成途中のキメラ（合成獣）を逃がしてしまい複数の死者をだしてしまったのだ。

キメラはあつと言う間に繁殖し収拾のつかないことになってしまった。

そして旧中心街は高い城壁、分厚い鉄城門で完全に封鎖されてしまった。

それ以来旧中心街は妖しげな魔術師や犯罪者のねぐらと化し寄りつく人は皆無となったが：よくない事は一度起きると何度も起きるものだ。

どこぞの阿呆が何を血迷ったか“クトウルフの外なる神”を召還してしまったのだ。召還されたのは伝聞だが“トゥルースチャ”、死と腐敗を好む踊り子の神。

完全な召還こそ成功しなかったが腐敗の症気が旧中心街から溢れ出し、数え切れない死者を出したのはほんの二百年前の話だ。

多重の結界と浄化魔術陣が張り巡らされてはいるのだが、いまだ完全な浄化は済んでいない。

普通なら立ち入る事のない所だが私には少々“特別な”用事があった。そこでしか出来ないことだ。

路地をしばらく進むと、高い城壁とルーン文字の刻まれた鉄城門が見えてきた。

門の隣には小さな今にも崩れそうな監視小屋があった。

監視小屋、とは名ばかりの物で実際は猫の子一人いないただの掘っ立て小屋にすぎない粗末なものだ。

鉄城門はいわゆる正門であり、有事の際にしかあけられる事は無い。普段は監視小屋の中にある城壁内をくり貫いて作られたトンネルを通って旧中心街へ入る事になっている。監視小屋はひどく寂れ、カビの臭いと酷い量の埃に満たされていた。雨風を防げてなおかつ居座っても誰の迷惑にもならず文句も言われない場所だが無宿者が住んでいた形跡はない。

流石に隔壁の向こうに地獄が待っている場所には住み着きたがらなかったようだ、ここよりボロ屋の軒下の方が数倍は住みやすいだろう。

監視小屋の中には今に崩れて壊れてしまいそうな朽ちた机と、脚が一本欠けた丸椅子が奇跡的なバランスで立っていた。机の上には変色し、色あせて黄緑になったクリップボードが放置されている、おそらく元は深い緑色だったのだろう。

クリップボードにはこれまた変色した古い官用紙で作られた書類が数枚挟まれていた。その紙は宣誓書と題され、名前と日付が書く欄が開けられており、その後には私は此処に自らの意志で立ち入り、何が起ころうと自由都市に保障を求める事を行わないことを誓います。と記されている。

言うなれば宣誓書というよりも入館者名簿のようなものだ。ここは危険極まり無い場所だが原則立ち入りは禁じられてはいない。

この宣誓書にサインさえすれば誰であろうと入ることは容易なのだ。

立ち入りを禁じればエルフにしるヒトにしる何故か入りたくなる

もので、そして時折行動力のある馬鹿が現れて本当に馬鹿をしたりする。

無断で侵入した学生四人が内蔵が全て抜き取られた変死体となって発見されその遺族と保障問題で一時期大騒ぎになったそうだが、これは百九十年ばかり前の事件で中央図書館に行けばバックナンバーの新聞で確認出来るだろう。因みに学生は肝試しの為に入ったらしい、肝を試して肝を本当に“抜かれては”様がない。

それ以来宣誓書に納得した者は正規の立ち入り希望者として、宣誓書に納得せずそのまま侵入した者は不法侵入者として扱うようになり行動力のある馬鹿は激減した。

まあ大概の者は浄化魔術が施された隔壁でさえ防ぎきれず隙間から漏れ出る沼気に怖じ気づいて踵を返すものだが。

不親切な事に筆記用具は置いていなかった、仕方ないので多目的ポーチから万年筆を取り出して記入した。

そろそろインクが切れかけているな等と考えつつ宣誓書を丁寧に折りたたんで懐にしまっ、これがあると死体が見つかったても身元やらなにやらが分かるので便利だそうだ。

隔壁には特に鍵は掛かっておらず、ただ押すだけで開いた。

ただ長きに渡って誰もこの隔壁を開いていないらしく、錆び付いた隔壁は下手をすると壊れるのではないかと思うほどの軋みをあげる。経年劣化を防ぐ魔術がかなり前に効力を失ってしまったようだ。なんとか隔壁を開きトンネルに入る、中は全くの暗闇で何も見えず、なおかつ埃とカビ臭さは監視小屋よりもずっとひどい。

一応安っぽい白熱灯がある程度 of 感覚を開けて天井からぶら下がっているがどうせ壊れているか寿命で役に立たないだろう。

隔壁を閉める前にポーチからフラッシュライトを取り出しておく。まったく、普段私が使っ入り口も此処までは酷くないぞ。

軋みをあげる隔壁を壊さないように出来るだけ優しく閉じると、世界が闇に包まれた。ウッドエルフ種ならこういう所でも問題なく見える程目が発達しているらしいがヒトの血が濃い私にそんな力

は備わっていない、フラッシュライトをつけ細く伸びる頼りない明かりを頼りに歩を進める。

「これは酷いな」

独り言は壁に反響し幾度もトンネルに響き渡る。その声に驚いたのかどこかでネズミが鳴く声が聞こえた。

城壁の分厚さは十五メートル、ばからしくなる分厚さだがそれくらい無いと沼気を抑えきれない。それほど“外なる神”の力は強大なだろう。

旧中心街側の隔壁もやはり酷く錆び付いていた。もはや隔壁と言うよりも錆の塊と形容する方がよいだろう。

とにかくかなり時間がかかったがかるうじで開く事ができた、正直腕の感覚がない。

腕を振ってみるとはがれ落ちて手袋に付着していた錆がぼろぼろと落ちた。

旧中心街は作りは新中心街付近の古風な魔導技術によって作られた町並みの並ぶ区画と何ら変わらない作りをしている。

だが他とは決定的に違う、何もかもが違って見える。

昼間で快晴だというのに日の光はどこか色あせ光量が減衰し、空気は僅かに黒く染まり重く肺にたまる気がする。

美しい造りの建造物群も別に汚れていたり血に染まっているわけでもないのにおぞましく思えてしかたがない。

まるでその全てが悪魔の住まう家のように気味が悪い…

実際そんな事は無く私の思いこみと妄想に過ぎないのだが、あまり長居はしたくない。たしかここには盗賊ギルドやら認可の降りていない魔術師ギルドがそこらに点在している、わたしは狩人ギルド所属なので関係はないがその筋の知り合いもいるので場所だけは知っていた。

だが用があるのはそこではない。

入り組んだ町並みをブーツの音も高らかに歩く、靴底の鋼板が立てる音がイヤに耳に障る。

十分ほど歩いて目的としている場所に到着した。

その“店”はひっそりとした地下店舗で、入り口へ続く階段は酷く暗くそこだけ清浄な空気が溜まっている。

それは主が“結界”を張っているせいで、その結界は自由都市中から集まった指折りの魔術師が死力を絞り尽くして張った幾重もの結界でさえ封じきれなかった沼気を完全に遮断していた。

階段に一步脚を踏み入れると今までの淀んだ空気ではなく澄んだ空気が肺を満たす、それだけで凄く気分がいい。生き返ったような気分とはまさにこの事を言うのだろう。

階段を下りきり獅子の顔を象ったドアノッカーに手を伸ばそうとした時、扉が勝手に音もなく開いた。入って来いという意味だろう。

広い部屋があった。

その部屋はベルベットの絨毯が敷かれ、薄紅の壁紙に覆われた紅い部屋だった。

天井にかかる華美な装飾の施されたシャンデリアは淡い紫の鬼火を数多くたたえ不気味に揺れながら部屋を照らしている。

その部屋の最奥、そこにはカエデ材から作られた私とは一生縁がなさそうな豪華な作業机が鎮座し、この店の主が両肘をつけてこちらを微笑みを向けていた。

「いらっしやい、そろそろ来る頃だと思っていたわ。整備でしよう?」

店の主、褐色のなめらかな肌をした“ダークエルフ種”の女性、ヴィクトリア。

豪華な滝のように流れ落ちる金髪を伸ばし、その身に纏うのは黒く艶やかなカクテルドレス。

細くたわめられた猫のような瞳はアメジストの輝きを宿している。「ええ、少し酷使したから間接に違和感がね」

私は作業机に歩み寄りジャケットを脱ぎ捨て革の手袋を剥ぐように脱ぐ、その下から現れるのは白い肌：ではなく黒金の装甲板。

私の右腕は“生身”ではない、自前の腕は七年前に“この世界で

最も大切なもの”と一緒に無くしてしまった。

衝撃を逃すように丸みを帯びた装甲とてらてらと粘性の光を放つ関節部、鋼ですら穿つ事を可能とする鋭利な指先を持った偽手。

動かす度に僅かに軋みを上げ気味の悪いそれを彼女は手に取り様々な角度から観察していく。

特に関節部を念入りに眺め、時折確かめるように装甲の隙間に指を差し込み奥を探っていく。

「そうねえ、関節部の肉が壊死しかかっているのと装甲版の劣化が酷いわね。一体どういう使い方すれば私の力作をここまで破壊できるのかしら」

頬に手を添え呆れたように呟くヴィクトリア、その瞳には呆れの色が淡く浮かんでいた。「装甲を形成して関節部を新造。組み立てから微調整を含めたらどれだけ時間がかかる事やら……この“呪詛偽手”がどれだけ組み上げるのに時間が掛かるかわかっている？」

“呪詛偽手”私を得た新しい腕。

遙か昔の失われた魔導技術の産物にして、魔獣の血と肉で作られた禁じられ忌み嫌われた技術。

魔獣の魔術に感応しやすい性質をもった神経を体に直接繋ぐ事で、まるで己が体のように偽手を扱え、動くまでのタイムラグが一切存在しない今で言う夢の技術。

だがそれが完全に歴史から末梢され存在そのものが禁忌とされたのにはそれなりの理由がある。

遺跡の付近に生息する邪悪な魔力を宿した“魔獣”の血肉を使い、人と半ば一体化させるという特性から魔獣を忌み嫌う魔術師達からは強い反感を買い。

そして他の魔力と強く反発することからその技術が使えないエルフが、魔力を持たず偽手と感応できるヒトにエルフと戦える程の力を与える事を懸念したせいでこの技術は完全に世から消された。

消されたといっても人の口に戸は立てられないわけで、彼女はこ

の技術をどうやってかは分からないが体得し私に施術してくれている。

呪詛偽手が禁じられたのは他にも理由がある。

持ち主と強く結びつくが故に、徐々に浸食していき体を蝕み、やがては乖離することができなくなる。

そして、痛みや苦痛は倍になり他の感覚はやがて薄れて消えてしまふ。

この技術はその名の通り呪いなのだ。

「悪かったわね、色々と酷使しなきゃならない場面が多かったのよ」

「酷使するくらいならそんな“内蔵武器”仕込まないで頑強な構造にすればいいのに」
ヴィクトリアはそう言っただけでワークデスクから一組の手袋を取り出した。

黒くつやつや光るそれは一見サテン生地で作られたただの手袋に見える、特筆すべき天はしいて言えば恐ろしく高級そうに見える程度の事だろうか。

するりと細いしなやかな手が手袋に包まれる、まるで一枚の新しい皮膚のようにそれは彼女の手にフィットしていた。

「じゃあ“外す”から」

両の掌に幾何学模様を組み合わせたような複雑な模様、魔法陣が展開された。紫の淡い光を放つ陣はゆっくりと回転し力の発露を促すかのようにうなりを上げる。

私は目を強く閉じて来たるべき苦痛に備えて歯を食い縛る、こればかりは本当に何度経験しても慣れることは無い。

「麻酔は無しね、下手に打つと神経と義手にズレが生じて二度と使い物にならなくなるから」

気軽に言ってくれるものだ…

何か濡れた物が潰されたような不快な音が部屋に響いた。

激痛、閉じていた瞼の裏が激しく発光し点滅する。いけない、意識を持っていかれる…「ああああああああ!!!」

大気を引き裂くような叫び声：これは私の声か？知らずの内に口が目一杯開き肺腑からひねり出した苦悶の声が溢れだしている。

それもそうか、片腕をもぎ取られて声一つ上げず平静としてられる人間等この世には居まい。

私の偽腕はヴィクトリアによって取り外されていた。外れた腕からは絶え間なく黒い擬似血液が湯気を立てて溢れだし、外の環境に耐えきれず床につく前には蒸発して消えていく。

彼女が展開した魔法陣は関節の接合を緩め神経を乖離させるための物。私には魔法の知識なんて欠片もないからよく分からないが以前そういうものだ教えてくれた。

「大丈夫：じゃなさそうね、せめてお茶でも飲めば良かったかしら」

お茶、おそらくダークエルフ種が好んで飲むベラドンナやらジキタリスを煎じた薬湯の事。軽い麻酔や幻覚作用がある：確かに飲んでおけば少しはマシだったかもしれない。もっとも味が最悪なので私は嫌いだ。

痛みあまり意味の無い事ばかりが頭を埋めていく、お茶の作用なんぞ思い出してなんになるというのやら。

私の意識は覚めやらぬ苦痛に苛まれ、必死に堪えたが深い無意識の底へと埋没していった…

目の前に倒れ伏す艶めかしい肢体を前に私はため息をついた。彼女、アイナの脳は苦痛で精神がおかしくなる前に自己防衛本能で意識を切ったのだろう。ブレーカーを落とすように。

まあ毎度の事でもあるし私でも麻酔も無しに片腕を切り離されたら気絶するだろうから仕方が無いが、毎回気絶されたら少し困る。

「ジャック」

「お呼びでご主人」

打てば響くと言った具合に店の奥から返事がきた、ビロードのカーテンで遮られた工房から小さい陰がするりと音もなく這うようにやってくる。

陰の正体は私の従者、ジャック。

愛嬌ある犬の頭部が人間の子供位の体に乗っかっている。彼は“コボルト”と言う種族の男で今年で六七になる。

もともと中央大陸東部に多く生息していた彼らは人間と深いつながりを持っていた。

小さい体躯だが力は大の大人が持ち上げる事の出来ないような物でも運べ、すこぶる俊敏、なおかつ何故か奉仕の精神に溢れほんの僅かな報酬…パンくずとミルクだけで彼らは己をなげうって働く。

ヒトの従者として働く者が多かったが最近ではエルフに仕える者も増えた、彼もそんなコボルトの一人だ。

「お客を一人処置室に運んでちょうだい、勿論丁寧にね」

「承知いたしましたご主人、何かお飲み物は？」

「熱いお茶をよろしく、ベラドンナを濃く少しブランデーを垂らしてちょうだい。いまから神経使うから適当に継ぎ足しておいてね」

「仰せのままに」

慇懃に一礼するとジャックはアイナを壊れ物でも扱つかのように優しく担ぎ上げ音もなく再び奥に引っ込んでいった。

私にはもつたい無い程よくできた従者だ、パン一切れと牛乳では安すぎるが彼らはそれ以上の対価を求めようとはしない、むしろそれ以外を与えようとすると憤慨したように怒る。それは彼らにたいして酷い侮辱にあたるそうだ。

「さつて…カトブレパスの装甲は余ってたかしらね」

一人呟いて店の奥の倉へ向かう、これは少し骨が折れそうだ…

第三章 右腕と魔女（後書き）

感想（r y）

作品内容ご存じの通り作者は変態です。

第四章 追いついてきた過去（前書き）

ぬとつと四章。特に進展は無し。説明ばっかりのくどい章です。

第四章 追いついてきた過去

私は今日中心街を抜けてあか抜けたおしゃれな雰囲気の通りを歩いている。

あの後失神してしまった私はヴィクトリアの店の奥の処置室で目覚めた。彼女の従者であるコボルトのジャックさんに介抱されて二時間程眠ってようやく意識を取り戻したそうだ。

今私の右腕には何も無く、偽腕の接続部分だけが残り、余ったジャケットの袖は高い位置で邪魔にならないように結んでいる。

もう日が落ちかけている、そろそろ完全に夜になり街灯が街を照らすだろう。

そうなるとこの街はいよいよ賑やかさを増し人通りは増える、自由都市の昼は交易や株取引の時間。そして夜は歓楽の時間。

二つの顔を持つ眠らない都市、そこからこの街を“不眠都市”と呼ぶ人も多い。

中心街へ続くこの通りはもう人で溢れている。エルフ、ヒト、獣鬼、小鬼、豚鬼、そして僅かだが妖精や精霊の姿もある。

本当に賑やかな街だ、これだけの人と種族が交ざり合うと私の異質さも緩和され人知れず気分がよくなる。目のインプラントも豚鬼族の耳飾りや獣鬼族の入れ墨よりは目立たないらしくすれ違う人にまじまじと見られる事はなかった。

中心街は大きな広場と駅を中心に放射場に広がっている、その周囲に公的施設が整然と建ち並びその向こうに歓楽街や交易街が広がる。

その静かな並びに一際人の出入りが少ない建物があった。近代的で無骨なフォルムの建物。ここが私の所属する狩人ギルド“緋の灯火”の本部。

二階建ての本部は頑強につくられ飾り気は一切無く用事のある者でさえある意味拒絶するかのような空気を放っている。

檜の木で作られた上等な鉛色の扉を開けると広い広い受付ロビーが広がっていた。

ヒトや小鬼の受付がずらりと並び、害獣対策課やら狩猟許可発布口などの看板が掲げられた窓口を様々な種族の人間が行き交っている。

私はその混み合ったロビーの中で不思議とそこだけ全く人気のない窓口へ足を向ける。そこは“敵対亜人種討伐課”と真新しいプラスチックの看板が掛けられた窓口で無愛想な小鬼が眼鏡越しに天秤をきつく睨みつけていた。

「こんばんはフレドリック」

そう呼びかけると小鬼の受付はこちらを見ようとせせず、ただ天秤を睨みピンセットで小さすぎる分銅をちまちま動かしながら話した。

「こんばんはアイナ、今押収品の森水晶の鑑定と計測に忙しい、手短に頼む」

窓口をのぞき込むと彼が神経質にさわる天秤の皿の上に乗る物がよく見えた。

透き通った爽やかなマカライトグリーンの硝石、照明の光を私の上半身で遮られてもなをそれは自ら光を発し燦然と輝いている。

「すごいわね、こんな上質な森水晶初めて見たわ。大きさも拳ほどあるわね」

「昨日小鬼の狩人が調査の際発見してな、そのままネコババしようとしたので押収されたものだ。たしかにこれだけあると一生遊んで暮らせるだけの金が入るだろうな」

小鬼は亜人種のなかでも小柄で、大きくても体調七〇センチにも満たない。だが力が強く機敏で、なによりも手先が器用で細かい作業を何よりも得意としている。

多くは装飾品を手がける職人となり、事務仕事を素早く淡々とこなす事も得意なので公的機関の事務員の半数も彼らが占めている。フレドリックは眼鏡を外すと小さく伸びをし、しわくちゃの手で

目頭をもみほぐし小さく唸った。

「なんで今時天秤で？量子重量計測計があればそんな大変な事しなくてすむんじゃないかしら？」

「その計測計が壊れたから古い方法を知っている年寄りの私に仕事が回って来たのだ。新人がうつかり計測計の入った箱を盛大に階段でぶちまけたそうだ、しかも運悪く整備からかえってきた“貴重鉱物管理課”全ての計測計をな」

彼は官用紙に小鬼の言語でなにやら書き付けながら呆れたように私にそう告げた。私は小鬼の言語は聞くだけなら何とかなるが読むとなれば全くわからない、こればかりは勉強しなければならないのでどうしようもない。

「お気の毒に…」

「気の毒だと思うならささと帰れ、年寄りの仕事増やして楽しいか」

「楽しくはないけれど私も仕事なのよ、本当に申し訳ないけどね」
ポーチから取り出した保存ケース二つと報告書を収めた情報メディアケースをカウンターのの上に置くと彼はため息を漏らしつつそれを受け取った。

「確かに受け取った、勤勉でなによりだ」

「弾代だつて口八じゃないのよ、それに働かないと色々情報入ってこないしね」

「…そうか、だが君が望む情報は今は無い、目立ったものでも管理課の課長と遺跡課の受付に不倫疑惑があがった程度だ」

「あいにく私は給湯室での茶請け話しなんぞに興味はないわ。“地獄耳のフレッド”の言うことだから信用はするけどね」

「フレッドはよせ、私の愛称はフレディだ」 「そうね、私は貴方の奥さんじゃないものね」

そう言つと彼は緑の皮膚を真っ赤にして小さく毒づいた。

「貴様ろくな死に方をせんぞ」

「お互い様よ、じゃあねフレディ」

用事は済んだので踵を返しさつさと帰ろうとすると、かれが背中
に声をかけてきた。

「そう言えば届け物があったぞ、分厚い文書ファイルだ。君の住
所が分からなかったからここに送った。らしく君の所に送って欲しい
と言う旨の手紙がついていたので送っておいた。そろそろとどいて
いる頃だろう」

一度立ち止まり考える。

私にそんな物を送りつけてくる相手がいるかどうかをだ。

何かの勧誘なら直接家に送るだろうし友人なら電算機で直接デー
タを送ってくるだろう。ではいったい誰だ？

「どうした？」

「……………なんでもないわ、ありがとうフレディ」

よく分からないがそんなに悪い物ではないだろう、爆弾やら呪い
の術を込めた何かを送られるような覚えは無いしそのたぐいのもの
だったら郵便局で廃棄される対象だからこつちには送られてこない。
中身は帰ってからの楽しみといこう…

既に日がとつぷりと沈み月が燦然と空に輝く時間帯。賑やかさを
増した繁華街を歩いていると様々な臭いが鼻孔を刺激する。

煙草の焦げた臭い、路肩を賑わす移動式屋台で湯気を立てる様々
な料理の臭い。そして様々な種族独特の体臭。

エルフは基本的に五感が鋭いが視覚と嗅覚は特に鋭い。目は闇夜
でもしっかりと目標を視認し、鼻は全てをかぎ分ける。

もっとも私は“半端者”なのでそれ程ではないが、鼻だけは少し
自信がある。

職業的には目が良い方がずっと有り難いのだが、無い物ねだりを
しても仕方なからう。

向かっているのは私の家。まあ家と言っても安宿の一室を長期契
約で借り切ってそこに済んでるだけの間に合わせだが。

さて、今日の夕食は何にしようか…

等と考えつつうろついていると、私の食欲を掻き立てる臭いが鼻

孔を掠めた。

肉と数種類の根菜をコンソメスープで蒸し焼きにした北方の料理。ニョールだ。

エルフは豚肉はあまり食べない、狩猟よりも農耕に長けている事もあり、肉は鶏肉くらいしか食べないのだ。

まあそこは異端の私なので何でも食べるから関係ないが。ゲテモノでもある程度なら平気で食べられる。ただしムカデは駄目だ。あれは煮ても焼いても、揚げてさえも不味かった。あれは恐らく我が人生で食した最悪の生物だったであろう。

中型の移動式屋台でニョールを煮込む豚鬼の店主に声をかけると彼はなつつこい笑みを浮かべて私と夜の挨拶を交わした。

「良い夜ね、景気はどう？」

「悪くはないね、評判がいいおかげだ」

豚鬼は亜人の中でもヒトやエルフに友好的な種族で知られている。

美食の種族にして山に住まう者、それが彼らだ。

もともと北方に多く分布しそこからはあまりでなかったがエルフが世界を平定させて以来世界中でみかけるようになった彼等の目的は美味しい食事を作ること。

戦にかけて北方では無類の強さを誇ったが彼等が心から愛するのは“食”である。世界が安定しある程度安全になると彼等は様々な大陸に進出し新しい食材を求めて広がって行った。今や豚鬼は世界中で有名な料理人の種族なのだ。

「ひとつくれる？量は少なめでいいわ」

そう言うと店主のハルドは少し笑って紙のプレートにニョールを盛りながら言った。

「お得意様なんだからサービスさせてくれないか？食べないからあんたはそんなに細いんだよ」

堂々たる腹を揺らしながら笑う彼はこれでもかとプレートにニョールを盛ってくれた。単に私は小食なだけなのだが。

豚鬼の美的感覚、と言うよりも美人感だが。女性は太っていれば

いるほどより魅力的らしい。男として嫁さんを十分に太らせてやれないような奴は旦那失格みたいな事も聞く。要するにふくよかであることが一種のステータスであるそうだ。

「あなた達みたいに大きかったら狙撃手やってられないわよ。かくれるのが大変じゃないの」

「違いない」

プレートに蓋を被せてからハルトは紙袋にニョールを入れ私に寄越した。受け取って銀貨を一枚渡す。

銀貨はつやつやと輝くエルフ共通通貨でドラクルと言う。白金硬貨一枚が金貨五十枚で金貨一枚が銀貨百枚、そして銀貨一枚が銅貨五十枚。今のところ世界で最も多く使われている通貨はこのドラクルだろう。

ニョールは一杯銅貨五枚、彼は銅貨を四五枚お釣りに寄越した。数にすれば凄い量に思えるが、二センチほどのそれは中央に穴が開けられており、十枚ごとに紐で束ねられているので扱いはそんなに困らない。

どのみち片手の私には少し持てあますのだが。

そう言えば彼の妻がそろそろ第一子を産む頃ではなかっただろうか、少し前にそんな事を聞いたような気がする。

「ハルト、奥さんの具合はどう？」

「そろそろ産まれそうなんであ、先週から入院してるよ。俺もそろそろ親父かあ…そう思うと感慨深いな」

そうなると一家の長である彼はもつと忙しくなるだろう、それこそ子供を成人させようとすれば銀貨が何枚必要になることやら。

そうだな、出産祝いくらい渡しても罰は当たるまい。まあ私の神は悪行だろうが善行だろうが全く気にしないだろうが。

お釣りを財布に入れ、奥を漁る。一番大きな硬貨を探し…あつた。白く輝く複雑な文様が彫り込まれた直径四センチほどの大きな硬貨。裏にはエルフを象徴する宿り木と弓の紋章、表には時の皇帝ハリエルフのフォルンツルプスヴィント帝が厳めしい顔を顰めてい様

が刻みこまれている。

「ハルト、手を出して」

「なんだ？」

差し出された彼の手は大きく、タコが沢山あった。毎日手がすり切れるまで食材を切りフライパンを振る働き者の料理人の手だ。

「出産祝いだ、受け取って」

白金硬貨一枚をその掌に乗せてやると彼は酷く驚き大きな目を見開いた。特徴の豚耳までヒクヒクと震えている。

まあ出産祝いで渡すような金額では無いから当然かもしれないが、白金硬貨一枚を銀貨に換算すると銀貨五千枚、一家が数年暮らしていける程になる。

「アイナ、いくらなんでもこんなには……」

私に白金硬貨を押し返そうとするハルトを目で遮って一歩下がる。確かに遠慮する気持ちは分かる。私から見ても大金だし、客から金を無償で貰う事が料理人としてのプライドに障るのだろう。彼は誇り高い料理人であることは重々承知している。

だが私は彼にどうしても受け取って欲しかった。私の本心では……

「貴方とは客と店主での付き合いが主だけど、それは買い物の時だけでしょ？ 少なくとも私は貴方を大切な友人だと思っているのよ。友達に子供が産まれるんだから出産祝いくらい送らせてほしいわ」

彼とは商売以外でもわりと懇意にしている。彼の家族と一緒に食事に行ったり、彼の愚痴を聞いたり。それは彼も否定しないと思う、むしろ否定してほしくはない。

ハルトは暫く難しい顔で唸っていたが、やがて万感の意を込めて溜息をつき、私に微笑む。少し呆れたような言葉つきでだ。

「負けたよアイナ。ありがたく受け取っておくよ。友人からの贈り物だ、感謝する」

自然と私も笑みを浮かべていた。傷がひしゃげて酷く不気味だろうが喜びが伝わっていると嬉しい。

私は店を後にすると中央に向かう人の流れに逆らって都市の外周部に向かう。西方最外縁区画、通称貧民地区のスラム街に私の家はある。“ギルマンハウス”という寂れて傾いた看板を掲げる安宿で、その西日が良く当たる部屋を月に銀貨五枚で借り上げているのだ。

狭くていくら掃除しても埃つぱく、歩く度に床が断末魔の軋みを上げるようなボロ部屋だが、これできて住み慣れると中々悪いもんでもない。妙に小綺麗過ぎる部屋よりもずっと落ち着くのだ。

商売柄綺麗な所よりも、薄汚い所や野山を駆け回る事の方が多いので多分そのせいだと思うが、清浄過ぎる空気がどうにも私の性に合わない。

やはり何処かに生活臭や人の臭いが無いと落ち着かないし、気に入らない。我が事ながらおかしな事だ。

自由都市は広い。それはもう広い。中央区画から最外縁まで歩いて帰るもんじゃないくらい広い。普通は馬や車で移動する距離で路面電車だつてあるので、それを使うが私はどれも得意ではない。

そもそも馬なんか乗った事ないし、自動車の免許も無い。電車はさつきいった通り苦手だし乗合馬車なんてもつての他だ。揺れるし人は多いしろくなもんじゃない。

結局十分近く早足で歩き続けて、やっとこさ西部最外縁区画へたどり着いた。

ここまでくると雰囲気も大分中央区画とは違う。都市開発計画で新たに作られたばかりの区画なので急造の掘つ立て小屋みたいな粗末な建物が建ち並び、仕事帰りとおぼしき土建屋や無宿者の姿がちらほらと見られる。

見窄らしい格好の孤児や難民のようなヒト達、お世辞にも柄が良いとは言えない異種族。ここは言うなれば自由都市の掃き溜めであった。

暫くすれば開発が始まって都市の景観に合った上品な石造りの建物が出来てくるのだろうが、あと十数年はこのままだろう。新しい

城壁が完成するまではこの区画が整備される事は無い。

あまり活気の無い喧噪に遠くから聞こえる喧嘩の声。耳慣れない言語に子供の笑い声や鳴き声がそこらを埋め尽くしている。

石畳もどこかおざなりな通りを歩いてやっと自宅に帰還した。

他の建物よりは幾分かマシな見た目の二階建ての宿屋、ギルマンハウス。軋んでもげそうな扉を開くと埃っぽくて薄暗いロビーの受付カウンターに一人の年老いた男のヒトが暇そうに座っていた。彼がここの宿主だ。

覇気どころか生氣すら感じられない落ちくぼんだ瞳が暗く輝くゾンビのように思える。

カウンターの横を通り過ぎて階段に向かおうとすると、さっと分厚い書類封筒を持った手に遮られた。

「お届け物です」

私に封筒を差し出す老人の男の目を少し見つめた後で封筒を受け取る。ずっしりと重かった。

封筒を渡すともう用はないと言わんばかりに男は再び暇そうに虚空を眺める作業に戻る。この男は本当に生きてるんだろうか？

古い一步踏み出す度に叫ぶような悲鳴を揚げる階段を踏み抜かないように気を付けて上る。一回勢い余って踏み抜いて修理代を請求されたのは秘密だ。

それなのに修理した痕跡が板を当ててあるだけってのが引っかかるが気にしないようにしよう。

二階西側奥の部屋が私の部屋だ。貸部屋でないと示すように扉にルームナンバーは刻まれていない。

部屋は相変わらず埃っぽく、照明代わりのランタンに封じ込められた鬼火を起こしてもどこか薄暗い。

良く物が少ないと言われるけど必要最低限の物しか置いていないだけだ。タンスが一棹にクローゼットとベットと机に椅子が一脚後は本棚が一つあれば全て事足りる。

机の上にニョールの包みと茶封筒を置き、ジャケットを脱いで

椅子に引っかける。片手では何もかもが不便だが、仕方ないと諦めるしかないな。

ニョールの包みを開けると、それはまだ暖かな湯気を立てていた。包みに簡単な保温の魔術が込められていたおかげだ。

付属の紙スプーンでニョールを手早く片付ける。味は鼻屑にしているだけあつて美味しかった。

一息ついてから放置していた封筒を手にとってみる。

大きさは共通企画の二型程度（A4位）、分厚さは4センチ程。下が歪にふくらんでいる事をみるとデータ媒体が入っているようだ。

宛先は書いてある。緋の灯火本部の住所だ。送り主の名前や住所は………何処にもない。振ってみても触ってみても特におかしな所は無い。開けても大丈夫だろうか？

まあいつまで弄くついても内容が分かる訳でもない、さつさと開けてしまおう。

封筒の中に入っていたのは数十枚の共用語でかかれた書類の束と、電算機でデータを出し入れできるところにもある企画のCDR。そして便箋用の小さな封筒だった。

袋の中に袋。もしかしてまた袋は入ってるんじゃないだろうか。などと思つたがそんな事はなく何の変哲もない無地の便箋が幾枚か入っていた。

内容は………あれ？

これは……？ 一体………

意識が………

あれ、何で床が壁に？ いや、私が倒れているのか？ 椅子は？

ああ……… 一体なんだ？ これ………

第四章 追いついてきた過去（後書き）

ぶっちゃけ最後と最初以外は全くいらない章。いや、雰囲気出したかったんです。すいません。感想とか欲しいです。

幕間2 (前書き)

幕間 2

幕間 二

雑然とした場末の酒場で身長が二メートルを超える漆黒のローブを纏った男が目立たない端の席で一人酒を煽っていた。

豪華な装飾のなされた魔法剣は腰から外され今は円卓に立てかけられている。

薄暗い店の隅の更に薄暗い円卓に座るのは男だけではなく、もう一人の同席者が居た。同じく黒いローブを纏った長身の女だ。フードは被っておらず、それでも薄暗い店の中でその顔を詳しく伺い知る事は出来ない。

特徴としては長い金髪を頭の高い位置でくくり、長い前髪は心中線で分けられている。耳は鋭く尖る二等辺三角形、エルフの物だ。女の隣にはその身長を軽く凌駕する艶やかな黒染めの杖が立てかけてあった。杖の末尾には大きな黒く輝く宝石が埋め込まれている。魔術師が用いる魔力を増幅させる為の魔術長杖だ。

女の目の前にも酒のグラスが置かれているが、それには手をつけられた気配は無い。なみなみと適当に注がれた安酒が所在なさげにゆれている。

「まだなの？」

ガラスの鈴を控えめに打ち鳴らしたかのように、涼やかな声が響いた。耳が痛い程騒がしい酒場の中であってもその声は嫌に鮮明に響く。

「そろそろだろう。時は満ちた」

「満ちたら物は欠ける運命にあるのよ。欠ける前に決着をつけないと、次に満ちるのはいつになるかさえ分からないのに」

女はどこかいらついているようで細くしなやかな手に机の上でタップダンスを踊らせる。長い爪が刻むリズムは速く、神経質なテ

ンポで響く。

その時、酒場の扉が控えめに開かれた。客達は誰もその事に気づかず入り口を見ようともしない。

ただ、この二人を除いて。

新たな客は背の低い小柄なヒトの男だった。どこにでも居そうな平凡な顔つきで、特徴と言えば燃えるような赤毛と左目の下に刻み込まれた大きな古傷程度の物だ。

小柄な男も例に漏れず黒いローブを纏っている。いや、それはローブと言っよりも合成繊維で編まれたポンチョのような物だ、フードは無い。

男は迷う事無くその席に歩を進め、空いている席に腰を降ろした。そして自分の獲物をポンチョの下から取りだし同じく机に立てかけた。

一メートル程の大きさの黒く細長い筒。大半がツヤ消しのマッドブラックに塗られた強化プラスチックで構成されるそれは先端部にスライドポンプを備えている。

女はぐるりと周囲に視線を巡らせた後で小さく口を開いた。

「消えろ」

ふっと、その場から全ての音が消え去った。グラスが打ち合わせられる音、がさつな笑い声、酒場の喧噪全てが彼女の声に合わせて全て消え去ったのだ。

それでも彼等はそのことに気づいたような様子はなく、享樂のままに騒いでいる。正確に言えばこの円卓についている三人が喧噪から切り離されたようなものであるので当たり前だが。

「さて、時も人も揃ったな」

「あの子はどうしたのよ？」

「私が書状を送った」と長身の男。赤毛の男は腰のホルスターに収まっていた物をテーブルの上に出しつつ首を捻った。どうやら色々収まりが悪かったらしい。

「こっちも根回しは完璧だ、いつでも潜れるぜ」

「そうか、ならば宴は近いな、乾杯といこう」

長身の男と金髪の女はそれぞれ卓上のグラスを手に取り、赤毛の男はポンチヨの中から銀色に光るスキットルを取りだし酒杯の代わりに掲げる。

「輝ける日々に」

「失せた思い出に」

「消え去った時間に」

乾杯。唱和と共に三つの酒杯がかち合わされ、それぞれの喉を酒精が降る。酒が尽きると三人は己の獲物を手に席を立ち、酒場を後にした。

目的を果たし、因縁を断ち切り、仇の血を全身に浴びる為に……

…

幕間2（後書き）

一月以上ぶりの更新です。遅い上に短い……

見ていてくれる方がいるのならしばしお待ちを、今現在必死に書きためております故。色々忙しいんです受験とかで。

感想とかくれたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3639i/>

復讐の牙

2010年10月9日07時54分発行